研究課題　14～17世紀における奄美･琉球関係史料の学際的研究

研究経費

研究組織

　研究代表者　　　村木二郎（国立歴史民俗博物館・准教授）

　所内共同研究者　黒嶋敏（画像史料解析センター・准教授）

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館・准教授）  
田中大喜（国立歴史民俗博物館・准教授）  
池田榮史（琉球大学国際地域創造学部・教授）  
鈴木康之（県立広島大学人間文化学部・教授）  
池谷初恵（伊豆の国市教育委員会・文化財調査員）

研究の概要

（１）課題の概要

　琉球は明の冊封を受けた14世紀以降、周辺諸島を軍事的に侵攻していくが、そのうち奄美諸島への侵攻過程については史料的な制約が大きく未解明な点も多い。しかし近年、奄美諸島のうち琉球の侵攻対象となった喜界島では重要な中世遺跡の発掘成果が相次いで報告されており、考古学の見地から琉球側の勢力伸長の過程を跡付けつつある。一方で、当該地域に関する同時代の文献史料は乏しいが、のちの時代に作成された地誌類や絵図といった近世・近代史料のなかに援用しうる歴史情報を持つものが少なくない。  
そこで本研究では、14～17世紀における琉球の侵攻・支配について、喜界島に焦点を定め、考古学・文献史学それぞれの視点から学際的に検討を進めていく。考古学の研究者による、現地調査を主とした当該期の集落の検証と、文献史学の研究者による、史料編纂所が所蔵する関連史料の原本調査と高精細デジタル撮影を主とした比較・解析を行い、双方の研究成果を突き合わせ、成果を公開して「史料の研究資源化」を行うものである。

（２）研究の成果

　千竃文書は鹿児島県出水郡長島町在住の個人所蔵資料で、現在は長島町歴史民俗資料館に寄託されている。その地理的条件から、資料の重要性は知られていたものの実物を実見する機会は限定されていた。そこで調査成果を踏まえて、国立歴史民俗博物館で複製品を制作し、広く研究資源として活用できるようにした。この史料には中世の喜界島や奄美大島を含めた南西諸島の情報が盛り込まれており、史料編纂所所蔵の関連史料と併せて調査・研究することで理解が深まる。そのため、2021年3月開催の国立歴史民俗博物館特集展示「海の帝国琉球－八重山・宮古・奄美からみた中世－」のⅢ章「境界領域としての奄美」2節「北からみた奄美」コーナーではこれらの資料を陳列し、南九州の武士団が奄美を含めた領域をどのように認識していたか追究した。一方で、考古学的調査成果として奄美地域の集落遺跡から出土した陶磁器を分析すると、これらの史料の時期には集落に大きな変化はなく、その後の15世紀中頃の琉球による侵攻期に大変動が起こることから、南九州の影響と琉球の影響の在地に与えたインパクトの差を比較検討することができた。また、正保琉球国絵図写の撮影によって高精細画像が得られ、紙の継ぎ目の折れ部分などこれまで見えなかった細部が明瞭になった。また村や航路に書き込まれた文字情報もより鮮明に読めるようになった。  
しかし、今年度は新型コロナウィルスの感染拡大に伴う研究活動の停滞と行動制限により、当初予定していた調査を完遂することができなかった。そのため未調査分は翌年度に延期することとし、研究費264,230円は繰り越すこととした。